

東アジア四千年の永続農業

中国・朝鮮・日本 (上) (下)

F. H. King 著／杉本俊朗(横浜国立大学名誉教授) 訳

【序文】

F・H・キング

中国、朝鮮および日本の農業上の慣行や慣習に関して、本書で述べられている事柄を考察するに読者諸子を最も便ならしむる上に、一言序文を述べる必要がある。今日西洋諸国民の農業的および他の産業的活動を特色づけ、支配し、決定している大きな要因は、百年以前には彼らにとっても、またそれまでは一切の人々にとってもそうであったが、物理的な不可能事であったことを銘記せねばならぬであろう。

合衆国は、未だ広大な処女地にわずかの人間が広く散在しているにすぎない国で、男、女、子供各一人の維持に対して20エーカー〔8ha〕以上であるが、他方、今からその農業慣行について考察していく国民たちは、三千年以上も耕された土地で働き続けているのであり、一人当たり2エーカー〔80a〕しか有せず、またさらにその土地すら半分以上は農耕不能の山岳地帯であることに注意を払わねばならない。

さらに西欧ならびに合衆国東部への飼料および鉱物性肥料の貨物の大移動は、開始以来百年足らずであり、中国、朝鮮および日本の土壌の肥沃性を維持する手段となることができなかつたし、またそれはヨーロッパないし合衆国でも無限に続けられるというわけにはいかない。目下のところこれらの輸入により、われわれの近代的装置による汚物処理やその他の誤れる処置による植物栄養素の浪費は黙認されている。しかし蒙古人種は、都市や田園のこれらの廃物をすべて蓄積している。そしてわれわれが無視している他の多くのものを、その田畑に施用することによって農業に役立てている。

四千年の間に獲得せる惰力で働いている無垢の伝統を有するほぼ5億人の強靱な人種の実践のあるものを考察せねばならない。すなわちこの人種は道徳的にも、知能的にも強く、機械的にも有能であり、しかも近年、科学と発明とが、西洋諸国民にもたらしたあらゆる可能性を利用するまでに目覚めているのである。そしてそれは長い間心から平和を愛してきたが、しかしいざというときには自己防衛のために戦うこともできるし、また戦いもしようという人種なのである。

われわれは、つとに中国や日本の農民と顔をつき合わせ、彼らの田畑を踏査し、世界で

最も古いこの農民たちが幾百年もの圧迫と経験とにより採用せざるを得なかったその若干の方法や、器具や、その慣行等を目で知ることを望んでいた。われわれは、二千年あるいは三千年さらに四千年にもわたって、なお現在これらの三国に住んでいるが如き稠密な人口の維持のために、その土壤に充分な生産をなさしめることが、いかにして可能であるかを知りたいと願った。われわれはいまやその機会を得た。ほとんど毎日、われわれはどこへ行こうと、出会ったその状態や実践にはまったく啓発され、驚かされ、仰天させられた。つまり幾世紀にもわたってこれらの国民がその自然資源を保存し、利用してきたり、現にそうしているその方法と程度とに啓発され、また彼らがその田畑から得ている収益の量に驚かされ、かつ多量の能率のよい人間労働が、わずか食事付き5セント（米貨）——換言すれば、食事を除いて15セント——の日雇い賃金で喜んで提供されるのに仰天させられた。

日本の三大島嶼は、1907年に耕地2万平方マイル〔518万ha〕に4697万7003人を養っていた。これは1エーカー〔40a〕につき三人以上の割合であり、1平方マイル〔259ha〕につき2349人の割合である。しかも1907年の日本の全農業輸入品が、その農業輸出品を凌駕すること、一人当たり1ドル〔2円〕弱であった。

オランダの耕地がその全面積の三分の一にすぎないと見積もってさえ、1905年の人口密度は、これによれば、日本の三大島嶼の人口密度の三分の一にも足らぬのである。同時に日本は耕地1平方マイルにつき馬69頭、牛56頭——馬と牛が役畜のほとんどすべてである——を飼養しているが、他方われわれは1900年に、役畜として同じ1平方マイルにつき馬と騾馬（らば）30頭を飼育していたにすぎぬ。

人間の食べられない草や粗穀を食べて乳肉を提供してくれる家畜として、日本は1650万羽の鶏を飼養していたが、これはすなわち1平方マイルにつき825羽で、3人にわずかに1羽という割合にすぎない。われわれは1900年に、家禽は2億5060万羽を養っていたが、これは耕地1平方マイルにつき387羽にすぎぬが、しかも一人につき3羽強の割合であった。日本では豚、山羊、羊のような粗食して自ら食糧となるものは、1平方マイルにつきわずか13頭にしか当たらず、180人ごとにこれらを1頭もっていた。然るに1900年に、わが合衆国ではどうかといえば、草および粗穀を肉および牛乳に代えるものとして養われていたのは、改良農場1平方マイルにつき牛95頭、羊99頭、豚72頭であった。この計算において牛1頭は、羊および豚のおそらく5頭に等しいものと換算されねばならぬ。というのは乳牛の食糧生産能力は高いからである。

叙上によれば、わが合衆国では1平方マイル〔259ha〕につき日本の単位では646以上の割合で養っており、日本の場合のように人口180人ごとに一単位ではなくして、男、女、子供各一人について五単位余りを養っていることになる。これと同程度に正確な統計を中国で入手することは困難であるが、山東（シャンドン）省でわれわれと語った一人の農夫は、12人の家族をもち、もっぱら役畜として1頭の驢馬（ろば）と1頭の牝牛と2匹の豚を小麦、雑穀、甘薯および豆を作っている耕地2.5エーカー〔1ha〕に飼っていた。

この場合、人口密度は1平方マイル当たり人間3072人、驢馬256頭、牛256頭、豚512頭に等しい。所有地1エーカー三分の二なる他の例では、農夫は家族10人で驢馬1頭と豚1頭を養っており、したがってこの農地は1平方マイル当たり3840人の人と驢馬384頭、豚384頭の維持能力をもっている。換言すれば、わが国の農民たちが一家族にとっては小さすぎると考える40エーカー〔16ha〕の一農場に人間240人、驢馬24頭、豚24頭の維持能力を与えている。われわれが訪ね、そこで同様な資料を得た七つの中国人の保有地は、平均して人間1783人、牛または驢馬212頭、豚399頭の維持能力を示している。すなわち消費体1995および家畜399を農地1平方マイル〔259ha〕当たり維持し得る。中国に関する叙上の記述は、厳密な意味の農村人口を表現している。1900年における合衆国の農村人口は改良農場1平方マイルにつき61人、驢馬(らば)と馬30頭の割合であった。1907年の日本の農村人口は1平方マイルにつき1922人および牛馬計125頭という密度であった。揚子江(ヤンズーヅァン)の河口にある面積270平方マイル〔7万ha〕の一大島嶼たる崇明島(チョンミン)の人口は、1902年の国勢調査によれば、1平方マイルにつき3700人の密度をもっており、しかも大都市は一つしかないのであるから大部分は農村人口である。

もしかかる稠密な人口がかくも広範囲に、中国、朝鮮および日本の土壌の生産物で養われるようになったすべての条件について、すべての国民に充分にして正確な説明がなし得るものなら、それは彼らにとって何よりもまず産業上、教育上および社会上の重大事たるにほかならぬであろう。この進歩が経てきた段階や局面や実践の数々はそっくりそのまま過去の中に埋められているが、しかし数百年前に獲得され、かつほとんどなんらの衰退を示すこともなく現在に立ち至ったかくも顕著な維持能率は、最も深い研究に値するし、いまやこれをなすべき機はまったく熟している。われわれは孤立的な国民生活から世界的国民生活への転換期の初めに、すなわち産業上、教育上、社会上の深刻な再編成が生ずべきときに生活しているのであるから、このような調査はいくら急いでも急ぎすぎるといふことはない。いまや各国民が他国を研究するのに最適の時期であり、相互の協調と互助的努力とによって、これらの研究の諸成果はあらゆる関係者に利用されるようにならねばならず、誰もが世界の進歩において同等の、また互いに助け合う構成要因となるような精神で、そうされねばならない。

叙上の問題を研究するにはなほだ適切で、かつ計り知れぬほど有益であり、市民ならびに国家にとって互いに有益である一つの手段は、あらゆる国民の高等教育機関が野球チームを通じて交歓する代わりに、有能な指導者の下に東西の国際的協調によって彼らの最良の学生団を選んで送り出し、その中のどれもが東西文明の構成要素を含み、特に定められた問題を研究することを己の目的とする調査団を、学生団のうちから組織するということである。もしこのような運動が、よく計画され、指導され、最も有能な青年たちから構成されるならば、国際的知己を生じ、青年が成人するにつれ発展する一群の重要な知識を押し広げ、世界の平和と進歩に対し広く貢献するに違いない。ここに示唆される如き国際的

努力の広範なる計画が樹立されるならば、その維持費は、わが国の海軍拡張のために用意される莫大な額の中から必要なだけを支出することによって十分に賄われるであろう。蓋しこれら世界の向上と世界の平和のためにとられる手段は必ずや軍備の増加よりも有効であるし、またより経費が少なく済むであろう。それは阻隔の精神と利己的利益を求めんとする精神よりは、むしろ相互協力の精神と公正な仕方の精神を培うであろう。

多くの要因と条件とは極東の農場や農民たちに、その高度の維持能率を与えるに与あずかっているが、その中のあるものを簡潔に述べることにしよう。稠密な人口が発展し、しかも今なお維持されている中国、朝鮮および日本の諸地方は、その影響が農業生産に関する限りは格別に有利な地理的位置を占めている。南中国の広東（グワンドン）はキューバのハバナと同緯度にあるが、他方満州の奉天（フンティエン）や日本の本州北部はニューヨークやシカゴおよび北カリフォルニアとほとんど同程度の北にすぎぬ。合衆国は主として北緯30度から50度までの間にあるが、これら三国は40度から20度の間にあり、はるか南に約700マイル〔1130km〕にわたっている。三国に比較的長い農耕季節を与えるこの位置上の差異のために、三国は同じ土地で毎年二毛作、三毛作および四毛作すら行なうという農業組織を工夫することができた。南中国、台湾および日本のある地方では稲の二期作が行なわれ、浙江（チュウジアン）省では油菜、小麦ないし大麦または蚕豆（そらまめ）、紫雲英（れんげ）が作られ、引き続いて盛夏には棉または稲が作られる。山東省の冬作、春作の小麦または大麦が作られ、夏には高粱（コウリヤン）または粟、甘藷、大豆または落花生が引き続いて作られる。北緯39度のシンシナティやインディアナポリスや、イリノイ州のスプリングフィールドと同緯度にある天津（ティエンジン）では、少しばかりの保有地で、小麦を作り、次いで玉葱を作り、さらに次いで甘藍（かんらん）〔キャベツ〕を作って、この三種から1エーカー〔40a〕当たり163ドル（正貨）を得ている農民と話した。そしてわれわれと話をした別の農民は春にできるだけ早く馬鈴薯を植えて、小さいうちに市場へ出し、続いて大根を、しかもそれに続いて甘藍を栽培し、三種の作物で1エーカーにつき203ドル（正貨）を得ていた。

ほとんど5億の人間が、主として合衆国の改良農地よりも小さな面積の生産物で養われている。シカゴから南はメキシコ湾まで、また西はカンザス州を横切って引かれた線で正方形を描くと、その面積は中国、朝鮮、日本の耕地より大きいくらいであるが、後者の耕地でわれわれの人口の5倍くらいが養われている。

これらの国々における降雨は、わが国のメキシコ湾沿岸および大西洋岸の諸州より多いばかりでなく、作物生産にとり効果が最高とされる夏季にもつばら多く降るのである。南中国の降雨量は約80インチ〔2032mm〕で、そのうち冬季中に降る量は極めてわずかであるが、わが国の南方諸州では雨量は60インチ〔1524mm〕近くで、その半分足らずは6月から9月の間に降る。スペリオル湖からテキサス州中央を通って引かれた線に沿う地方の一年の降雨量は、約30インチであるが、この降雨量のうち16インチだけが5月から9月の間に降るにすぎない。然るに中国の山東（シャンドン）省では毎年24イン

チ [610mm] 余りの降雨量があつて、このうちの17インチ [432mm] が5月から9月までに降り、かつその大部分は7、8月の両月に降る。最良耕地で、水が少しも染み込んでなくなることはない所でも、農作物の多くは1 tの乾燥穀類を成熟させるのに300ないし600 tの水を必要とするものであるといわれているが、適時にもたらされる有効な水分の適量は、いかなる土壤にとつても高度の維持能力の第一要因でなければならぬということ、したがつて極東においてはその集約的方法と相まつて、その土壤から大なる収益を生み出し得ることはすぐに了解せられるところである。

これら三国の極めて主要な食糧としての米と雑穀の選択、およびこれらのものから最良の利益を挙げるように発展させた農業組織は、われわれにとっては注目すべきものであり、しかも西洋諸国民をして充分再考三省せしむるに足る要諦と原則を把握していることを示している。

これらの国には多量にしかも好適な降雨があるにもかかわらず、その国民のどれもが、実際その田畑に降る雨の全量のみでなく、さらに近くの耕作不可能の山岳地方からの莫大量の流水を利用し得る一作物を選んでゐる。水田を作り得る所にはどこでも稲が栽培されている。日本の三大島嶼では耕地の5割6分、すなわち1万1000平方マイル [285万ha] が稲作に充てられ、植付けから収穫近くまで水につかっている。その後土地は乾かされ、季節が許す所では、その年の残りは旱地作物に充てられる。

極東の農業方法を、実地について研究する者にとっては、これらの国民が他のいかなる国民にもまして数世紀前に作物生産における水の価値を正當に評価するようになったことは明瞭である。彼らは条件を作物に適応させ、また作物を条件に適応させ、最も集約的に施肥し、同時に旱魃および洪水の両方に抵抗して最大限の収穫の保証を許す穀物としてついに稲をもつに至つた。最も湿潤な気候下にある西洋諸国民の実践をもつても、いかに完全に、かつ高度に施肥しようとも水が足りなかったり、多すぎたりするために収穫は減少する年の方が多いのである。主として稲作の役に立つ壮大な運河組織について適切な観念を、言葉なり地図なりにより伝えることは難しい。内輪に見積もつた所でも、中国の運河は優に20万マイル [32万km] はあり、おそらく中国、朝鮮および日本の運河のマイル数は、合衆国の鉄道マイル数を凌駕しているであろう。中国だけでも合衆国が毎年小麦のために用いる耕作面積と同じくらいの面積を稲のために用いている。そしてその年の生産物はわが国の小麦の年収の2倍以上あるいはおそらく3倍であろう。さらに全稲作地域は毎年そのほか少なくとも一種類、ときには二種類の収穫を挙げるのである。

主要な主食作物として早熟性雑穀あるいは耐旱性雑穀を選んで、灌漑用水を利用し得ない所ではどこでも栽培し、どこでも株または播畝 (ドリル) に植え付け、間作を許し、かくして幾世紀も前から土壤の水分を保つために根覆いの利用を採用したために、これらの人々は乾燥季および雨量わずかなときに最大限の収穫を確保することができた。すなわち、それらの雑穀は夏の暑い気候によく生育する。好適な土壤の湿度が最低限に下がったときでも、枯れることなく、雨量が多くなれば強大に生長する。かくして合衆国より雨量が多

くその分布がよく、かつより暖かなより長い季節をもつ極東では、われわれの見るところによれば、これらの人々はまれに見る賢明さをもって、彼らの稠密な人口を維持せんがために、わが国の人々が夢想だにもしなかったほどまでに、またそれほどの集約度をもって、灌漑と旱地農法とを結びつけた。

これらの国のどれにおいても、土壌は自然に普通よりも深く、元来肥沃でかつ持久力があるという事実にもかかわらず、至る所で慎重にして、合理的な施肥方法が実行せられている。やっと最近に至ってしかも日本でのみ、無機質の金肥が用いられるようになった。しかし、何百年もの間近くの丘陵や山腹を含めてすべての耕地や、運河や、川や、海が、耕地の施肥にできるだけ役立つようにせられてきて、そしてこれらの貢献の総計は大きなものとなっている。中国、朝鮮および日本において、その広大な山岳および丘陵地方は容易に近づき得ない区域を除けばすべてが、燃料や木材や堆肥および堆肥用の草類を供給する役目を全能力を挙げて負わされてきた。そして家庭で使われるほとんどすべての燃料や薪の灰が、結局のところ肥料として田畑に用いられるわけである。

中国では驚くほど多量の河泥が、ときには1エーカー [40 a] に70 t、いやそれ以上もの割合ですら田畑に施用される。したがってまた、なんら運河もない所では普通の土壌と心土は村まで運ばれ、次いでそれらが必要とされる合間に、多くの労働を費やして有機質の廃物と混ぜ合わされ、しばしば後になって乾かされ、田畑に持ち帰る前に粉にされ、自家製肥料として田畑に用いられる。人畜を問わずあらゆる種類の糞尿は慎重に蓄えられ、われわれのやり方よりははるかに効果的な方法で田畑に用いられる。

日本の農務局の統計によれば、この国における下肥の総量は、1908年には2395万295 tに上っている。すなわち耕地1エーカーにつき1.75 tである。上海市の公共租界は、1908年に毎朝早く住宅や公共地に入り下肥を運び去るその年度の権利を、中国人の請負人に売り渡した結果、7万8000 tの汚穢に対して、3万1000ドル（正貨）以上を受け取った。ところがわれわれは、これら廃物のすべてをただ捨てているばかりでなく、捨てるためにより大なる金をかけている。

毎年規則的に製造され、土地に施用される肥料の日本における生産量は、購買される金肥を除いて、耕地1エーカーにつき4.5 t以上にもなるのである。6月18日にわれわれが通り過ぎた山海関（シャンハイグアン）と満州の奉天（フォンティエン）の間で、幾千トンとも知れぬ乾燥せる高度に硝化された土糞が最近田畑に運ばれて、そして「作物に餌をやる」ために待機して、うず高く積み上げられているのに出会った。

1888年になって初めて、全欧の最高の科学者によって率いられた30年以上の長期にわたる研究の後に、その根に寄生する下等生物の宿主の役割を演ずるマメ科植物は、土壌中の窒素の維持——それは窒素を直接空気から抽出し、腐食過程を通じて空気に還元するのだが——に主として貢献することが、証明されたものとして結局容認された。しかし幾百年もの実践は、極東の農民たちにこれらの作物を作り、そして利用することは肥沃度を保つ上に不可欠であることを教えた。それゆえこれら三国の各国において、土壌を肥沃

ならしむるという明確な目的のために、非常に広範に他の作物と輪作でマメ科植物を作ることが、彼らの昔からの不動の実践の一つなのである。

稲の穫り入れの直前ないし直後に、しばしば田畑には紫雲英（れんげ）（*Astragalus sinicus*）が播かれるが、次の植付けが近づくまでは生長するままにされ、植付けのときには直接地下にすき込まれる、さらに多くの場合には運河に沿って堆積され、堆積する間に運河の底からくみ上げる軟泥を染み込まされ、20日から30日くらい発酵させられた後、田畑に用いられる。それゆえわれわれのように乗用すきを用いないというだけで、おそらく無知視されているこれらの古い世界の農民たちが、長い間彼らの輪作の中にマメ科類を含ませ、そしてそれを不可欠なものとなししていたのはまさに真理である。

時間は実にあらゆる物理的な化学的な、そして心理的な反応の関数たる如く、あらゆる生命過程の一つの関数である。農民は産業的生物学者であって、かかる者として彼はやむを得ず自分の作物の時間的必要条件と一致するように仕事を適合しなければならぬ。この東洋の農民は他の誰よりも時間を経済的に使う者である。彼は最初と最後の一分と、その間のすべての時間を利用する。外国人は、中国人が常に焦りもせず急ぎもせず、いつも悠長であるといつて非難する。これはまったくそのとおりであり、これだからこそ彼らは、まったく未来に望みをかける国民であり、機会を逃がさぬ国民だとされる。彼らが長い間しみじみ感じたところによると、有機物を植物栄養素に利用し得る形に変えるためには多くの時間が必要であり、そして彼らは世界で最も多量にそれを使用しているとはいえ、この有機物の最大部分は田畑に施用しないうちに、多くの時間と人間の労働をたくさんかけて、土壌ないし心土と一緒にあらかじめ寝かされる。そのために実際は彼らの栽培期間が長引くので、他の場合はできないような組み合わせ作付け法が可能とされるのである。間作と同時に株や作条〔播き溝〕への植付けによって、一時に同じ畑地に三種の作物が生育しているのが極めて普通に見られる。しかし成熟の段階が異なっていて、一つはほとんど収穫期に近く、もう一つは発芽し始め、ほかのは極めて重そうに土壌を持ち上げている程度の段階にある。このようなやり方やたくさんの施肥や必要な場合の補助的な灌漑によって、土壌は生育期を通じて最善を尽くすようにさせられる。

これらの国の毎年の稲の作付け反別は莫大であるにもかかわらず、すべて株に作られ、どの苗も移植される。これをやって、彼らは人間労働の点を除けば、多くの方法で節約する。蓋し人間労働こそ、彼らにとって過剰に持っている唯一のものである。十分に苗代を準備し、高度に施肥し、細心の注意を払うことによって、彼らは30日ないし50日の間に、やがて10エーカー〔4 ha〕を占めるに足るだけの植物を、わずか1エーカーに栽培することができる。そしてその間に他の9エーカーでは作物が成熟し、収穫され、そして稲が移植され得るまでになったときには、田圃（たんぼ）は稲を受け入れるように整えられつつあり、實際上この期間は彼らの栽培期間に加えられる。

養蚕は、大きな、またある点では最も注目すべき東洋の産業の一つである。その壮大なること、明らかにそれは少なくとも西暦紀元前2700年の昔の中国に発生地をもってい

ること、また森にすむ野生の昆虫を馴育したということに起源があること、4千年以上にもわたって存続し、その数百万ドルに及ぶ生産物の積み荷が合衆国の西海岸に積み下ろされ、クリスマス取引のために東海岸に特別急行で殺到するほど発展していることなどは驚嘆に値する。

内輪に見積もっても中国の生糸生産高は年1億2000万ポンド〔5万4400t〕程度で、日本、朝鮮および南満州の一小地域の生産高を加えれば、おそらく年1億5000万ポンド〔6万8000t〕程度を凌駕し、おそらく全額7億ドルに達するであろう。そしてその金額は合衆国の小麦生産額にまったく匹敵するが、しかしわが国の小麦生産地面積の八分の一以下の面積から生産されるのである。

中国および日本における茶の栽培は、これらの国の他の重要な産業であって、それは国民の福祉に重要な役割を演ずる点において養蚕に勝らぬとしても、養蚕と肩を並べている。この産業が、飲用として湯に何か味をつけるという必要に基づいていることは、ほとんど疑うべくもない。湯を飲むことはこれらの国では、今までのところどの人口稠密なる国の飲料水からも除くことのできぬ致命的な病原菌に対して、個人的に用いられる充分能率的な自衛手段としてごく普通に上げられているのである。ここまでのところ設けられた極めて完全な衛生方法の成功から考えてみれば、また人口の増大とともに非常に増加すべき種々な内在的な諸困難を考慮に入れれば、近代的方法は、結局衛生効果の上において失敗するに違いないということ、また絶対的安全性は、とうの昔、蒙古人種が採用した飲料水を沸かすのと同じ効果をもつある方法によってのみ確保し得るということは避け難いように思われる。

1907年には日本の茶栽培地は12万4482エーカー〔5万ha〕で、687万7975ポンド〔2万7600t〕程度の乾燥茶を生産した。中国においては、年産額は日本のそれよりはるかに多く、四川（スーチュワン）省からだけでも年々4000万ポンド〔1万8000t〕程度が西藏（シーザン）〔チベット〕に移出される。そして外国への直接輸出は、1905年には1億7602万7255ポンド〔8万t〕程度で、1906年には1億8027万1000ポンド程度であった。それゆえ乾燥茶の年輸出量は2億ポンド〔9万t〕程度以上に上り、またその全年産量はこの量の2倍以上であろう。

しかし他のいかなる要因にも増して、かつおそらくそれらすべてを結合させたよりも著しく、これらの国が達した高度の人口維持能率に貢献するという点では、勤労階級がそれに適応を余儀なくされざるを得なかった生活水準を挙げなければならない。そしてこの生活水準と並んで、彼らの注目すべき勤勉および努力と生活のどんな点にまでも実行している極めて強度の節約とが挙げられねばならぬ。

ほとんど1フィート〔平方フィート=約0.9m²〕の土地といえども、食糧、燃料、織物の材料を提供するようにさせられる。食用になし得るものは、すべてなんでも人間か家畜の食糧として役立っている。食べられないものまたは身にまとえないものはすべて燃料に用いられる。人体の排泄物、燃料のくず、他の用に立たないまでに使い尽くされた織物

の廃物は田畑に返される。そうする前に、これらの廃物が風雨によって損傷されないように家に持ち込み、一ヵ月、三ヵ月または六ヵ月もの間、聡明に用心深く混ぜ合わせ、手を加えて、土壌用の肥料や作物のための栄養素として役立つように、最も効果的な形にするのである。臨時の一時間ないし一日の労働がわずかでも報酬を余計に生じそうな場合は、それはいつでもなされるべく、雨の日も炎暑にも義務を怠り作業を遷延することは許さざるべし、とはこれらの勤労階級にとって金科玉条であるように思われる。よしんば金科玉条でないにしても神聖な法則である。